

2013年度タイ & シンガポール研修旅行報告

先川 信一郎*

(受領日：2014年5月7日)

高知工科大学国際交流センター
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

* E-mail: sakikawa.shinichiro@kochi-tech.ac.jp

要約：2013年度のタイ・シンガポール研修が、3月3日から11日までの日程で行われた。高知工科大学（KUT）の学生17人（男子10人、女子7人＝4年生1人、3年9人、2年4人、1年3人）が、グローバルな視点を養い、英語によるコミュニケーション能力を高めることを目的に、タイやシンガポールの学生たちと積極的に交流し、研究施設、企業を視察した。タイでは泰日工業大学（TNI）、チュラロンコン大学、キングモンクット工科大学トンプリ（KMUTT）、シンガポールではシンガポール科学技術研究所（A*STAR）、材料研究工学研究所（IMRE）、シンガポール国立大学（NUS）、技研製作所などを訪れた。研修には、国際交流センターの先川信一郎特任教授、片山保夫教育講師、大内雅博教授を含む5人が同行し、とくにタイでの安全対策には万全を期した。学生たちはアジアの若者の熱いエネルギーや競争力を肌で感じ、大いに刺激を受けたと思われる。それは学習面だけでなく、今後の生き方にもプラスになろう。

1. はじめに

タイでは2013年11月以来、反政府デモが激化し、インラック政権は2014年1月22日から60日間の非常事態宣言を発令。反政府活動拠点が相次いで閉鎖され、バンコク中心部のルンビニ公園周辺は依然として不穏だった。研修は多少落ち着きを取り戻した時期ではあったものの、学生たちには決して中心部には近づかないように説明し、タイ情勢に最大限の注意を払うよう促した。

その後もタイでは5月20日に戒厳令が発令され、同22日には軍がクーデターで全権を掌握するなど混乱が続いている。

こうした現地情勢をよそに、学生たちは元気いっぱいだった。とりわけアンパワへの一泊旅行は思い出深かったようだ。学生たちはバディと寝食をともにし、語り合い、お坊さんに献花したことで、タイの仏教文化や自然を満喫していた。

さらに、TNIやチュラロンコン大学、KMUTTでの交流や講義、キャンパスツアーを通じ、英語によるコミュニケーション能力にある程度の自信をつけたと思われる。

一方、科学技術立国を目指し、東南アジアのハブでもあるシンガポールは、タイとは全く雰囲気

違っていた。その教育・研究レベルの高さや、未来志向の国家戦略、世界中から人材を集める仕組みは、学生たちにとって学ぶ点が多かったはずだ。

シンガポール国立大学のビジネススクールでは、MBA取得を目指す日本人留学生（社会人）に、KUTのマネジメント学部の学生たちが時間ぎりぎりまで質問していたのが印象的だった。

IMREでは、レーザーを使った実験や解析方法に興味を示し、科学技術分野の研究が、世界中の研究者と競争しながら進んでいることを実感していた。

以下は学生たちの報告・感想である。（学年・所属は研修実施時）

2. 友好とほほ笑み

本格的な研修は、バンコクに到着した3月3日昼から始まった。天気がよく、真夏の日差しと気温でタイに来たことを実感した。私たちは宿泊ホテルのロビーに集合し、約10分歩いてTNIに到着した。

まず、TNI国際広報部の児崎大介さんによるオリエンテーションが行われ、KUTを代表して藤原龍也さんが挨拶した。藤原さんは、日本とのマナーの違いやルール、タイでの礼儀作法を知りたいことな



図 1. TNI の正門でみんな元気いっぱい



図 2. KUT 代表による挨拶ですぐに空気が和んだ

ど、私たちの気持ちを上手に言葉にしてくれた。

オリエンテーションでは、TNIでの過ごし方や規則、マナーについて学んだ。ところが、突然停電となり、少し慌てたが、タイではよく起こることだと児崎さんが説明してくれた。1分ほどで停電は直り、オリエンテーションが続いた。

キャンパスツアーでは、図書館や、研究室、教室を見て回った。私たちにはすべてが珍しく、積極的に英語や日本語、ボディランゲージを使って質問した。TNIは日本語が必修の大学であるため、図書館には日本語の本や教科書がたくさん置いてあったのが印象的だった。

ただ、訪問した時期が休暇期間であったため、タイの学生たちが普段キャンパスでどう過ごしているかを見ることはできなかった。

キャンパスツアーの後は、TNIの学生とともに全員が自己紹介をした。私はタイの文化に興味があることを話した。

その後はバディを決定した。私たちは順番にくじをひき、バディとその場で顔合わせをした。バディ決定後、ウェルカムディナーが開かれた。初めて食べるタイ料理は一体どんな味がするのだろうか。私たちはわくわくしていた。

タイ料理には、日本料理にはない辛さがあり、戸惑ったKUT学生も数名いたようだ。ディナーでは、積極的にバディ以外の他のタイ人学生と交流する学生もいた。日本人学生とタイ人学生はすぐに打ち解け、和やかな雰囲気となった。

【参加学生の感想】

海外研修は「コミュニケーション」と「工業技術の現状」を知るよい機会であり、将来の自分の研究、生き方を考える上でプラスになった。

研修前は、相手に自分の気持ちや情報を正確に伝えられるだろうかと少し不安だったが、予想以上に

日本に興味のあるタイの学生が多く、すぐに慣れることができた。コミュニケーションは、まず“相手に関心を持つ”ことが大切であり、次に会話を楽しみ、意思疎通することだと気付いた。同時に、「話そう」「聞こう」という気持ちが、いかに重要かを学んだ。

一方、A*STAR 研究所における最先端技術の現状や各大学の研究設備を見て、海外の学生がどのレベルの研究をしているかを自分の目で確かめられたことは、貴重な体験だった。この有意義な体験を将来に活かしたいと思っている。

(システム工学群2年 田中雅子)

研修2日目となる4日は、KUTとTNIの学生があらためて顔を合わせ、KUTを代表してマネジメント学部3年の玉井里奈さんが挨拶した。

続いてTNI副学長のPorn-anong先生による「History & Present Day of Thailand (タイの歴史と現在)」の講義があった。ここではタイの歴史と政治の変遷を学び、タイへの関心と異文化交流に対する意識がより深まった。

TNI学生と昼食を共にした後、本学博士後期課程を修了したWimol先生の研究室を見学した。研究室の学生からは、画像処理やパターン解析などの電子回路に関する研究や、流体力学に基づいたレーシングカーの設計・製作の紹介があった。

KUT学生にとってやや難解な内容であったが、英会話による意志の疎通を図ることができ、同じ工学系の学生にとって良い刺激となった。

この後、Wimol先生の「Innovation of Future Technology (未来の技術革新)」の講義があり、「革新」とは何か、というテーマについて語り合った。革新とは「既存のモノを改良する」ことと「今までにな



図 3. Wimol 先生の話に真剣に聞き入る KUT 学生

かったモノを新たに生み出す」ことの2つに大別できる。どちらも豊かな発想と経験があってこそよい結果が生まれると、Wimol 先生は強調した。

「エジソンは『天才とは1%の閃きと99%の努力である』と言ったが、閃きなくしては何も始まらない」。この言葉にハッとさせられた。

【参加学生の感想】

人生初の海外での滞在ということもあって不安と緊張でいっぱいだった。しかし、日本を出て空港に着いた途端、胸の内は晴れた。いつもと違う景色、空気、言葉、そして人。すべてが珍しく、童心に返った心地だった。タイの学生はととても親身に接してくれ、言葉は違っても、コミュニケーションの本質は人と人とのつながりだと実感した。また、「日本で働きたい」というタイの学生も多く、彼らの熱意を受けて私たち日本人学生も国際交流にもっと目を向けるべきだと感じた。今回の海外研修では、他国の文化や価値観を肌で感じ、国際的な視野を広げることができたと思う。

(システム工学群4年 山下崇仁)

3. 感動を分かち合う

TNI での交流2日目の午後、私たちはタイ文化について学習した。タイボクシング、タイ楽器、タイの踊りの3つのグループに分かれ、タイ楽器は、擦弦楽器のソー・ドゥアン、鍵盤打楽器のラナートなどを使い「メリーさんの羊」の曲に合わせて演奏する練習をした。

擦弦楽器のソー・ドゥアンは日本の胡弓に似ていた。実際に演奏してみると、弓を押さえる指の細かな位置によって出る音が全然違うので、繊細で難しい楽器だということがわかった。TNI 学生のわかりやすい指導によって、最初に選んだ楽器を時間内に



図 4. 指の形はこう…。音色の美しさに感動

ほぼマスターし、次の楽器にチャレンジする学生の姿もみられた。

タイ文化の成果発表では、それぞれが練習したことをみんなの前で披露した。Wimol 先生のインタビューも受け、感想を英語で発表した。

次に、KUT の学生が日本文化について紹介した。1月から何度も練習してきたプレゼンテーションだったが、初回だったので少し緊張した。TNI の学生たちは、熱心に聞いてくれた。

一方、鳥山君のマジックには、みんなが体を乗り出していた。なるほど、一芸に秀でることは大切だ。日本の伝統文化「よきこい」を披露すると、TNI 学生はととても喜んでくれた。その動きとリズムには、すぐになじんだようだ。

【参加学生の感想】

私にとって今回のタイ、シンガポールが初めて訪れる外国だった。五感で感じ取るものすべてが新鮮で、日本とは違う雰囲気を感じた。タイでは日本に興味のある学生が多く、日本のことについていろいろ聞かれた。しかし、自分に十分な知識がなく、その魅力を伝え切れなかったのが残念だ。

まず日本をもっとよく知り、好きになり、アピールしていきけるようにならなければいけないだろう。英語力に関しては、ネイティブの人と話す時はどうしても緊張してしまうようだ。まだまだ努力が必要だと思った。

(マネジメント学部1年 合田久美子)

タイの踊りのグループだった私は、ヌッティさんとパイさんという民族衣装を着た2人の美女とパディに優雅な踊りを教えてもらった。

基本的な踊り方は、左手の親指と人差し指で輪をつくり、手のひらを上に向くようにして左手をへ



図 5. 踊りを教えてくれたヌッティさんとパパイさん



図 6. 栄華を誇ったアユタヤ遺跡

そに。その時右手は指を反るようにして額の高さにもって行き、肘は曲げる。次に左手と右手を弧を描くようにして変える。この動きをゆったりとした曲に合わせて歩きながら続けた。

最初は右手と左手の交互の動きが難しかったが、パパイさんたちに何度か促されるうちに上達した。TNIの学生は、踊ることが上手だった。「なんでそんなに上手く踊れるの?」と私のバディのトン君に聞くと、「ぼくたちは小さい頃から踊っていたからだよ」と笑いながら話してくれた。

20分練習した後、いよいよ舞台発表。私たちはハイネックの長袖、下は布を巻いたスカートにベルトという衣装を着た。布は少し硬い素材で、金色の刺繍が施されとても綺麗だった。村岸さんに男性の衣装を着せた時、一枚の布を巧みにズボンにしたことに驚いた。その様子に昔の人の知恵を感じた。

本番はヌッティさんとパパイさんに助けをもらいながら一緒に踊った。もちろん、手の角度や滑らかな動きを心掛けた。後でヌッティさんや友だちに「きれいだったよ」と褒めてもらい嬉しかった。

後にKMUTTでも「ダンスが上手だね」と褒められた。トン君の「小さい頃から踊っている」という言葉を聞いて、この伝統的な踊りは、私たち高知県民にとっての「よさこい」だな、と感じた。

私は保育園でよさこいを習い、夕涼み会や夏祭り、小、中学校の文化祭、体育祭でも踊ったことを思い出した。「踊る」ことは小さいころから大好きだ。

大学1年の時「よさこい」の本祭に参加した。ここでは踊りの練習を通じ、心を通わせる友を得た。

【参加学生の感想】

今回、タイの踊りを教えてもらったことが最も印象深い。村岸さんや小林さんと一緒に「こうかな? こうかな?」と試行錯誤しながら楽しく学ぶことが

できた。おかげで、タイ人と予想以上に仲良くなれたように思う。

踊りは、国境や人種を越えて、人と人とをつなぐことが出来る素晴らしいものだ。このような貴重な体験をさせてもらい、研修を企画してくれたみなさんに心から感謝している。

(マネジメント学部3年 小島和海)

研修3日目となる5日は、TNIの学生とともに味の素アユタヤ工場と、アユタヤ遺跡を見学した。ホテルからバスに乗り、朝7時半に出発。大きな渋滞に巻き込まれることなく高速道路を約1時間半走って到着した。味の素アユタヤ工場は、タイでは比較的手続きしやすいタピオカや、主力商品の味の素を一貫生産していた。包装工程では、管理レベルに応じて床の色と作業員の服装が決められ、工場から食卓まで品質が保証されていると感じた。

この後、アユタヤではWat Maha That 遺跡、Wat Yai Chai Mongkol 寺院を歩いた。遺跡では、像の頭部が破壊されているものもあった。ミャンマー(ビルマ)との戦争で壊されたという。寺院ではみんなで仏像にお参りし、仏教の歴史に思いを馳せた。

【参加学生の感想】

タイやシンガポールの学生との交流を通じ、日本人学生はもっと積極的になるべきだと痛感した。例えば、TNIでは学生たちが制作したフォーミュラカーを見たが、その制作費とスポンサーは、企業が企業に直接出向き、交渉して獲得したという。こういうケースは、日本ではあまりみられないが、タイの学生が積極的に行動することに感銘を受けた。

また、TNIのバディは英語に自信がない様子だったが、ボディラングージだけでも積極的に会話を進めていく態度は見習うべきだと感じた。コミュニケーションは、言葉だけに限らない。そんなことを



図7. 仏像にお参りする KUT の学生たち



図8. 辛いかな？ TNI 学生と食事を楽しんだ

あらためて実感した。

(環境理工学群3年 小松真也)

こうして3日間にわたった TNI との交流を振り返ると、私たちはタイの気候に慣れておらず、暑さと学内のクーラーを用いた温度差に、徐々に体力を削がれていたように思う。

それでも親身になって接してくれた TNI 学生たちに元気をもらい、スケジュール通りに交流することができた。

タイ人の中には日本語で意思疎通を図ることができる学生がいて、彼らの勤勉さには頭が下がった。多少日本語を使いながらコミュニケーションを図ることができたおかげで、私たちは多くのタイ人学生と良い関係を築くことができた。

もちろん、タイ人学生には英語が巧みではない人もいた。彼らは英文ではなく、英単語のみで必死に言いたいことを伝えようと苦労していた。そこは、お互い様だった。

タイ文化学習では、伝統あるタイの踊りや楽器に触れた。これは滅多にない良い経験だった。この異文化交流は、予想以上に楽しいものだった。

このほか、水上マーケットで楽しい時間を共有することができたのもよかった。TNI 学生は、自分がしたいようにそれぞれが行動していた。つまり、遊ぶときは遊ぶ、学習する時は学習する、といった具合に切り替えができる素晴らしい学生たちだった。

【参加学生の感想】

研修では、異文化に触れる中で実にいろいろな体験をした。それに加えて自由行動の時にはパディが、わざわざ巨大なショッピングモールや美味しい料理が食べられるレストランに連れて行ってくれたので、感激した。

バンコクは大都会であり、炎天下でのバス・徒歩

の移動はかなり疲れたが、お互いによい時間を過ごせたと思う。ただ、疲労のせいで、日記の付け忘れが多かったのが心残りだ。

(システム工学群1年 藤原龍也)

さて、研修4日目となる6日午前、チュラロンコン大学を訪問し、最初に工学部（構造工学）の Withit 先生の講義を聞いた。講義内容の1つ目は ASEAN 全体の発展がテーマで、タイは ASEAN の動きとともに、周辺諸国と協力しながら成長していこうという戦略を持っていることがわかった。

2つ目は、大学の世界ランキングについてだ。チュラロンコン大学はタイではトップの大学だが、世界ランキングでは思ったより伸び悩んでいた。その要因としては、外国人留学生の数や、有名で優れた教授が少ないことがあるという。

タイは他の国と比べて物価や賃金が安く、著名な外国人教授を雇うには、財政的に難しいようだ。とはいえ、学生たちをアメリカや日本に留学させて多くの人材を育てていた。

実際、チュラロンコン大学で人気のある留学先はアメリカだった。タイは日本と同じく英語が苦手な学生が多いが、大学の国際化に力を入れていた。

KUT への留学はタイでも人気があり、KUT がチュラロンコン大学と交換留学の覚書を締結することを期待したい。

講義の後は、専門分野（機械工学と電気電子工学）に分かれて研究室を見学した。修士課程の学生が丁寧に案内してくれ、電気電子工学では High Voltage Research Laboratory (HVRL)、Bioelectronics Research Laboratory (BERL)、Electromagnetic Research Laboratory (EMRL) の3つが興味深かった。

その後、昼食をチュラロンコン大学の学生と食堂で食べたが、英語能力はかなり高かった。最後はバ



図 9. ASEAN がテーマだった Withit 先生の講義



図 10. みんなで感動を分かち合ったワット・ポー

スでキャンパスを回った。

【参加学生の感想】

今回の研修では、良い経験をさせてもらった。特に楽しかったのがタイの学生との交流である。日本語を学んでいる学生もいて、専門科目に加え、英語と日本語の勉強を両立できていることに感心した。

英語が公用語でない国で、私たちが不便なく過ごせたのは、タイの学生のおかげだと感謝している。

これから私は修士課程に進み、研究で忙しくなるが、今回出会えた仲間たちと連絡を取り、お互いに高め合っていきたいと思っている。

研修では、自分に足りないところや自信を持つべきところもわかった。この経験は今後の学生生活に役立つはずだ。KUT には、夏休みを利用した海外インターシップのプログラムもある。ぜひ参加できるように準備したい。

(システム工学群 4 年 久坊将之)

4. 仏教の教え

チュラロンコン大学で研修を終えた後は、ワット・ポーやワット・プラケオ、王宮、ワット・アルンを見学した。大学を出発し、バスで約 30 分のワット・ポーに到着した。急遽、日本に興味を持っているというチュラロンコン大学の学生数名が参加してくれ、充実した見学になった。

チュラロンコン大学の学生の中には、日本語能力が高い人もいた。彼らのおかげで王宮の歴史的な背景をより深く学ぶことができた。タイ人にとって寺院は神聖な場所であり、いくら暑くても肌の露出は避けるというルールも学んだ。

一部の KUT 学生は、肌を隠すための羽織を借り、身にまもって見学していた。タイ人は入場料が無料だが、外国人は入場料を支払わなくてはならなかつ

た。この入場料は、寺院の修復や維持のために使われているという。

ワット・ポーでは、大きな仏塔の周りを歩いたが、時計回りで一周する方がよいと教えてくれた。葬儀の際は反時計回りで歩くため、時計回りの方が縁起がよいそうだ。

ワット・プラケオ、王宮は、日本の寺院や建物とは雰囲気が違った。守り神が至る所に鎮座していることや、細やかな金色の装飾は日本では見られないものだった。

さらに船でチャオプラヤ川を渡り、ワット・アルンを見学した。タイ語で「ワット」は寺、「アルン」は暁という意味だ。ここでは急な階段を使い仏塔に登ることができた。塔の上から眺めたバンコクの街並みは、絶景だった。

【参加学生の感想】

タイ人の学生たちと交流できたことが本当によかった。研修前は自分の英語力に自信が持てず、不安でいっぱいだった。しかし、実際に英語で話してみると、力不足を痛感したものの、もっと会話したいと思えるようになった。

また、タイの学生は私たちに優しく、とても親切で、いつも笑顔だった。タイという国が持つ人の温かさは、みんなが笑顔になれる不思議な力があるように感じた。様々な経験をさせてくれたタイの学生たちには心から感謝している。

(環境理工学群 3 年 安岡知紗)

研修 5 日目となる 7 日は、KMUTT を訪れた。学生実験室では、60 年前の古い実験装置が置かれていたことに驚いた。その装置は、磁力で負荷がどの程度かかっているかを今でも測定できるという。

KMUTT の学生たちは、私たち海外の学生と交流



図 11. 盛り上がった KMUTT でのじゃんけんゲーム

することに積極的だった。彼らが企画した「じゃんけんゲーム」は楽しく、罰ゲームの踊りでは、みんなが笑い、盛り上がった。タイの学生たちは「よさこい」にも興味があり、私たちから熱心に「よさこい」を教わっていた。

私たちを案内してくれた学生は、選抜された 15 名程度だったが、実は 200 人以上の学生が、私たちを案内するバディに手を挙げたという。この国際性は見習うべきだと感じた。

【参加学生の感想】

KUT の実験室には 2 人に 1 台ファンクションジェネレーター、オシロスコープがあり、研究環境はかなり整っている。この恵まれた環境で、もっと研究しようと決意した。

研修前は、海外の学生とどのようにコミュニケーションをとればよいのか不安だったが、彼らが話しかけてくれたおかげで、自分からも話せるようになった。

今では、積極的に留学生と食事をするようになり、毎日英語を聞くだけでなく、話せるようになった。この研修を通して、私の学生生活は大きく変わったように思う。

(システム工学群 3 年 田浪 荘汰)

7 日午後から、KMUTT 学生とともにタイ西部のアンパワーに 1 泊 2 日で出かけた。同大に短期留学中の群馬大学の学部生 4 人も同行してくれ、留学生活の様子を聞くことができた。

みんなで水上マーケットを楽しみ、夜は船に乗ってホテルを見物した。宿泊した古いロッジは熱帯のジャングルと川のそばにあり、タイの田舎の雰囲気満喫した。

翌 8 日は僧侶の修行見学から始まった。朝 7 時に



図 12. 早朝、タイのお坊さんに花を捧げた

集合し、KUT 学生、KMUTT 学生一人一人が神妙な面持ちで僧侶に花や食べ物を捧げた。その後、午前 10 時にアンパワーを出発し、KMUTT に戻った。

午後は、いくつかのグループに分かれ、TNI の学生、チュラロンコン大学の学生、KMUTT の学生と共に自由行動をした。タクシーや電車を使い JJ マーケットなどに足を運んだ。別のグループは昼食をすませ、買い物を楽しんでた。

【参加学生の感想】

今回の海外研修に参加し、タイの学生と行動したことで、異文化に触れることができた。異文化を直接自分の目で見て体感し、日本との違いを感じた。

タイの人々、シンガポールの人々の話す英語には独特の訛りがあり、同じ英語でも、国によってアクセントが多少違っていたことがわかった。これからたくさんの国を訪れ、異文化に触れてみたいと思っている。また、このような機会を提供してくれた、KUT の国際交流部をはじめとする、たくさんの方々に感謝している。

(マネジメント学部 1 年 鳥山 貴生)

KMUTT との交流を含め、タイでの研修の印象をまとめてみた。日本は醤油やダシの香りがする国だが、タイは例えるなら、香辛料一つ一つが主張し合っている。そんな香りがする国だった。

それとパクチー。人間の身体は不思議なもので、匂いを気に入っただけで「美味しい、食べたい」と捉えてしまう。香りで選んで失敗して、食べ物にも気候にも慣れた頃、勇気を持って挑戦する姿勢でいた私たちは、好奇心をもって自然に取り組む姿勢に変わっていった。

「日本じゃない場所」という環境からか、普段日本での生活では絶対に気付く事の出来ない「面白



図 13. 色とりどりの果物がそろったスーパー

いコト」を見つけ、たどたどしい言語力を気にすることなく「知りたい!」という素直な気持ちでタイの学生や先生にたずねた。どんな些細な質問であっても、彼らは真摯に答えてくれた。時には一緒に考え、行動し、お互いの文化に触れながら、有意義な時間を過ごすことができた。

特に郊外の地域では、店の人も一生懸命、説明に加わってくれたのが印象的であった。KUTでも学習してきた「都会の良さ、地域の良さ」を感じた気がした。タイと日本では、まだ日本の方が先進国かもしれないが、精神の強さや在り方はタイの方が進んでいるのではないだろうか。日本人が忘れ、思い出せないものを見つけた気がした。

タイの人は、私たちが日本から訪れた事を伝えると「日本は良い国だね」と言ってくれた。私たち日本人はタイを「日本より良い国だ」と感じている。それぞれに良さがあり、優れた国かどうかは比較することではないが、私はタイで暮らす人々を羨ましく感じた。帰国後何か行動しなければいけないと思った学生は、私だけではないだろう。

こんな学生たちとの交流を今でも思い出す。日本でも所属大学によって学生のキャラクターが異なってくるのと同様、タイの学生たちも大学ごとに素敵なキャラクターを持っていた。

KMUTT学生はすごく丸い。笑顔が柔らかかであるという印象を強く抱いた。彼らの殆どは仏教徒であり「徳を積む」という考えが深く根付いている。「滅私奉公」という言葉があるが、そのお手本である。素直な心で公の幸せを願う姿は交流する中で何度も見た。相手がどんな助けを求めているのかを感じ取り、自らにできることは行うという姿勢である。

一番感動した彼らの行動は「音楽」である。誰が



図 14. ギターに合わせて歌う KMUTT の学生たち

言い出したわけでもないのに、ギターを取り出し、気持良さそうに奏でてくれた。メロディに合わせて歌声を発する学生たち。太陽が登った朝で実に清々しくリラックスした空気になった。彼らは「今必要なモノ・今できるコト」以上に「今あったらいいモノ・今できるコト」を私たちに提供してくれた。その笑顔は、自然に溢れる素直な笑顔だった。

【参加学生の感想】

どんなにワクワクした好奇心を従えていても、不慣れな環境に飛び込み、その環境に適応して生活していくということは容易ではないと痛感した。

しかし、その環境に合わせていく中で今まで知らなかった自分を知ることができた。もちろん、その環境のことも知る事が出来た。不慣れであった環境は慣れた環境に変化し、元の環境に戻った時、自分が何をしなければならぬのかハッとしました。

そして、五感で吸収したことは、今まで掲げていた学業や生活、将来の目的・目標を見直す大きなキッカケとなった。「人は、知って初めて行動できる」。この言葉の通り、今いる自分の場所が鮮明になり行動できるようになった。研修前後で大きな変化を遂げることはできなくとも、これから先に大きな変化を起こせる自分に近づいたと思う。

(マネジメント学部2年 木村理紗)

5. 人材が集まる国

研修7日目となる9日は、タイを離れてシンガポールに向かった。初日はマーライオンを見学した。世界がっかり名所とはいえ、想像以上に大きく、口から水を出す姿は迫力があつた。

像のすぐ後ろに小さなマーライオン像があつたが、確かにこれならがっかりするだろう。シンガポール



図 15. マーライオンの前で暑さを忘れた



図 16. 植物園では夢中で珍しい熱帯植物を観察

は暑いですが、マーライオンの水しぶきと海風で涼しく感じました。

次に訪れたシンガポール植物園では、ナショナル・オーキッド・ガーデンというラン園に入ることができた。緩やかな斜面に沿うように様々なラン科の植物が咲いていた。

植物園は 52ha と広大な面積を誇り、ジンジャーガーデンなど魅力的なところもあった。植物は私の専門分野である。とにかく夢中で写真を撮った。

その後はバス見学で、シンガポール市街地、インド人居住区などを周った。ホテルは旅行会社のミスで違うところになったが、翌日には当初予定していたホテルに変更されたのでホッとした。

【参加学生の感想】

熱帯の植物の大きさが印象に残った。植物はどれを観察しても面白く、見飽きることがなかった。

一方、シンガポールは多国籍料理で、それほど魅力を感じなかった。私はタイ料理がすっかり気に入っていた。

タイの学生と一緒に食べたトムヤムクンは、冷や汗を流すほどの辛さだったが、その味に慣れてしまうと、おいしいと感じるようになった。日本に帰っても、数日は日本の味付けになじめなかった。こうした味覚の変化も今は懐かしい思い出だ。

(環境理工学群 3 年 笹沼聖輝)

シンガポールでの研修 2 日目、午前中は A*STAR 研究所と FusionWorld の見学をした。A*STAR 研究所に到着し、KUT 学生を代表して久坊さんが挨拶した。そこでは、臨床分子診断技術研究開発室のグループリーダーとして活躍されている高知出身の井上雅文教授から、シンガポールの特殊性や先進性と A*STAR 研究所についての講義を受けた。

同教授によると、シンガポールは面積が狭いことから、研究や製造業、軍事兵器の分野で、小型ながらも高価値なものに的を絞って生産している。

また、地政学的にはアジアの中心に位置する国であり、世界中から人材を集め、そこから生まれる科学技術分野のイノベーションで、アジアを引っ張るハブの役割をしているという。

私たち KUT 学生は、そのテクノロジーの一端を FusionWorld 見学で体験することができた。FusionWorld は、わかりやすくいえば近未来科学館である。入り口では、SF 映画に登場するような 3D の立体映像の女性が出迎えてくれた。

さらに、その奥では画面の前に立つ人物の性別、大人か子供かを見分ける液晶。脳波を測り、集中力によってキャラクターを操作するゲーム。3D 映像による、未来の乗り物体験。展示内容は、近い将来実現できそうなものから、夢のようなものまであり、ハイレベルな技術に興奮を味わった。

【参加学生の感想】

この海外研修を通し、私は異文化を知ることにとっても前向きになれた。今までは海外は怖いというイメージがあり、英語は将来必要になるだろうとなんとなく勉強していた。

しかし、実際に海外の人々や文化に触れたことで、自分はなんともったいないことをしていたのかと気付いた。私が出会った人たちは、目標に向かって一生懸命で、自分の国の文化をとても大切にしていた。そんな人たちの思いをもっと知りたいと思う。今後は英語というツールを活かし、国際交流をしていける人物になるという新たな目標ができた。

(環境理工学群 4 年 小林智美)



図 17. A*STAR 研究所で挨拶する KUT 学生



図 18. IMRE の入り口にある展示パネル

FusionWorld 見学後、私たちは IMRE とシンガポール国立大学 (NUS) 訪問の 2 グループに分かれた。

私が参加した IMRE は、材料の開発・加工・評価を行う研究機関で、そこで働く世界最高レベルの科学技術者の説明を受けながら、各研究室を回った。

最先端の設備を目の当たりにし、詳しい話を聞いているうちに、研究者を目指す私は興奮を抑えられなかった。

IMRE 訪問後、KUT 学生たちは、「とても刺激になった」、「自分も頑張らなくては」といった感想を一樣にもらしていた。

一方、NUS ビジネススクールは、自由でアカデミックな雰囲気があった。その半面、世界ランキング上位に入っているためか、ある種のよそよそしさも感じた。

【参加学生の感想】

10 日間の研修を通して様々な人と出会ったことは、確実に自分の成長の糧となった。タイやシンガポールの学生たちがひたむきに努力をしている姿を目の当たりにし、「自分も今のままではいけない」、「彼らに負けないぐらい努力をしなければいけない」と強く感じた。他の KUT 生からも「将来は海外で働きたい」、「海外の大学で学びたい」といった声が聞かれた。

この研修の優先事項でもある英語によるコミュニケーション力については、英語を使う機会が設けられているにもかかわらず、消極的になってしまい、じっくり会話をすることが出来なかったのが心残りだ。しかし、これをきっかけに帰国後は、積極的に世界に目を向けようと強く思った。

(環境理工学群 4 年 村岸建吾)

研修 9 日目となる 11 日午前、私たちは技研製作所を訪問した。同社の主な業務は、建設コンサルタント業務や土木施工技術、工法の研究開発だ。本学の敷地には、耐震地下駐車場「エコサイクル」第一号機を設置している。

本社は高知にあり KUT 学生も何人か内定を貰っている。海外のイギリス、ドイツ、アメリカなどに事業所がある堅実な企業だ。

同社の説明を受けて、将来、海外で働く事に意欲のある KUT 学生は心を躍らせていたと思う。

実際の質疑応答で感銘を受けたのは、「日本に限らず、エンジニアというものはどこの国でも柔軟な発想が求められる」という言葉だ。そこに英語力があれば、即戦力のエンジニアとして働くことができるだろう。

つまり海外で働くには、専門知識はもちろん、理系でも高い英語能力が必要ということだ。そこで私でもできるだけ英語の勉強をしようと決意した。

【参加学生の感想】

研修を通じ最も印象に残ったのは、タイ人との英語での会話と、チュラロンコン大学への訪問だった。タイ人の中には英語が不得意な学生もいて、会話にはとても苦労した。お互いに発音も文法も正しくない英語を使い、理解し合うのに時間がかかった。

そんなこともあり、TOEIC だけでなくインターナショナルハウスなどのグローバルな環境で、英会話の練習をしなければならないと強く思った。

チュラロンコン大学では、世界トップレベルの技術を視察し、私たちもトップレベルの環境で研究をしたいと感じた。KUT 学生全員が、以前にも増して英語や専門科目の勉強に意欲的になったのではないか。その意味で、実りある海外研修だった。

(システム工学群 4 年 出口修平)



図 19. 技研製作所では技術者の柔軟性を学んだ

ところで、シンガポールではタイとは全く違う暑さと国情の違いを実感できた。シンガポールの国花・蘭を展示している植物園では、日本ではめったにない種類の花を見ることができた。

マチの中心街を見渡すと、ここはタイとは違い、高層ビルがズラリと建っていた。観光スポットであるマーライオン、マリナベイサンズなどは世界中の観光客でにぎわっていた。

とにかく暑いので、近くにあるカキ氷屋に入ると、そこにはマンゴー、イチゴ、チョコ、に加えてドリアン味の商品もあった。これこそ混沌としたアジアの文化だと感じた。

NUS で、最先端の科学技術を視察した時、世界のトップレベルにたどりつくまでに莫大な費用がかかったこともわかった。発展のカギは世界中から集まってくる人材だ。国家戦略として、研究しやすい環境、研究に対する資金を国が惜しみなく提供していた。だからこそ、シンガポールは小国ながら、発展し続けているのだと理解した。

法令が厳しく、マチは清潔だが、その一方で、路上ではマンゴーやドリアンが売られ、その香りが通りでするのもこの国の魅力の一つだと感じた。

【参加学生の感想】

私にとって、タイで過した日々はとても印象深かった。以前、タイのインターンシップで TNI を訪れる機会があり、その時に出来た友だちが、わざわざ会いに来てくれた。

たった1度会っただけで、私のためにレストランを予約し、私が食べたいと言っていたマンゴーを買ってきてくれた。最終日はわざわざ空港まで、朝7時に見送りに来てくれた。

タイ人の友だちは、日本にも何人かいるが、タイで私が来るのを待っていてくれた友人がいることを

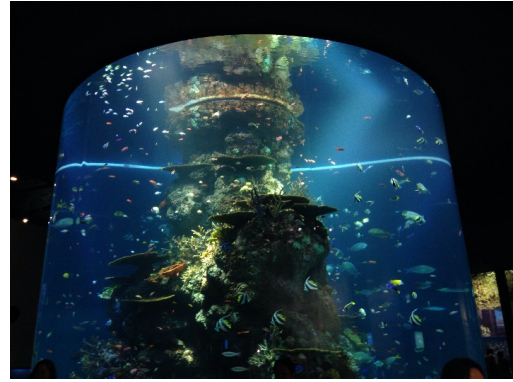


図 20. 巨大な水族館は人気の観光スポットだ

とても嬉しく思った。

また、一緒に行った KUT 学生から「タイで働きたい」、「KMUTT に留学したい」、「この国が大好き」といった言葉を聞いたことは予想外だった。私もインターンと今回の研修に続き、またタイに行きたいと思うようになった。

次に行く時には、タイ語の日常会話くらいは話せるようになり、もっとコミュニケーションをとりたいたいというのが私の願いだ。

(マネジメント学部4年 玉井里奈)

シンガポールは異質な国だった。混雑を避けるためか、エスカレーターの動きが速く、看板は多民族国家とあって4カ国語で表記していた。

タイでは日本車が多くて驚いたが、シンガポールは日本車が少ないように思えた。物価の高さはもちろん、高層ビルや舗装された道路、何もかもが、タイとは異なり、すべてが驚きだった。

研修では、7つの研究機関を有している A*STAR 研究所や、材料研究を行っている IMRE、近未来の世界を再現した FusionWorld を訪れた。

A*STAR 研究所では、井上雅文グループリーダーから、シンガポールの急成長の理由や、自身が取り組んでいる研究の話詳しく聞くことができた。

IMRE 研究所では5つの研究室を回り、研究の概要や実験装置を見学した。FusionWorld では、身体を使わず、脳波の集中力だけで進めていくゲームやフレキシブルディスプレイ、タッチパネルを搭載したダイニングテーブルなど、近未来の生活を体験することができた。これによって、私たちの今後の勉強のモチベーションが向上したのは間違いない。

【参加学生の感想】

シンガポールはどこを見回しても街並みが綺麗



図 21. 日本と同じ Universal Studio に大喜び

であることに驚いた。ポイ捨て禁止などを法律で定めているだけあって、マチのどこにもゴミが無く、すべてが清潔だった。

FusionWorld ではテレビでしか見たことのないような最新の電気機器に触れることができた。中でも私は、脳波だけで遊ぶことができるゲームを初めて体験し、感動した。

自由時間では世界最大の水族館であるシー・アクアリウムを訪れ、世界最大級のパノラマ水槽を目の前にして衝撃を受けた。ビジネスだけでなく、観光資源が豊富でシンガポールが急成長した理由がよくわかった。今回の研修は、学業のモチベーションはもちろん、ものの考え方、価値観の違いを受け入れる大切さ、英語の苦手意識の改善など、一生忘れられない思い出となった。

(システム工学群4年 西森俊作)

6. 同行者から

昨年に引き続き今年度の研修旅行へ参加した。参加学生の顔ぶれは当然のことながら入れ替わったのだが、個々の英語を話すという資質は今年度の学生の方にやや優位性があるものの、平均をとれば大きな変化はないように感じた。各学生の参加希望理由は、圧倒的に英語力の向上を目指すという点であった。

研修旅行を終えて、ただ単純に「慣れていないために使えない」から、「使える英語にしたい」と目覚めるきっかけになったという学生が多かったことで、個人によりレベルは色々あるが、参加する意義はあったであろうと感じた。また大きな改善ポイントとしては、頑張れば苦手な英語でのコミュニケーションも可能になると学生が感じ取り、今後の勉強意欲が膨らんだことである。我々教員が後押しをすることで国際人としてのさらなる進歩を期待し



図 22. NUS では MBA の学生たちと意見交換した

たい。

また、「海外の文化に触れてみたい」「国際感覚を磨きたい」「留学に向けての布石としたい」「参加する後輩への気遣いを実践したい」「海外の学生の勉強への取り組みを知って自分の糧としたい」「視野を広めたい」などの理由を挙げる学生もいて、英語力の向上以外にも期待を寄せられていることも知り、今後の海外研修継続への強い足がかりとなるであろう。

結果としては、昨年同様の大きな収穫を各自がそれぞれ得たようで、将来の勉強へのモチベーションが向上したことは旅行の最終日に実施した「研修旅行の振り返り」で全員が認める場所であった。各人が強調した点は自分の英語力が不足していることを実感し、今後の学生生活の中で必ず上達したいと述べたことである。

また海外旅行が初めての学生も大勢参加しており、海外も視野に入れた学習を目指そうという動機づけとなったとの感想も多かった。参加した各学生の若さゆえの適応力が発揮され、日本にいても日常に経験する他大学の学生との交流が、たまたまタイの工学系の学生との交流であったかのように、自然と馴染んでいたことは KUT の学生の持つ資質の高さなのであろう。外国人との交流に一步が踏み出せずにいる、他の大勢の学生達への良い鏡となることを期待する。

タイの訪問先の各大学のバディを務めてくれた学生達や、受け入れ側としてプログラム作成に尽力して頂いた各大学のスタッフの方の陰の力に深く感謝する次第である。
(片山保夫)

今回の研修は、参加学生 17 名という例年よりも大人数で臨んだ。そのため、全員の研修に対する目

的意識とモチベーションの足並みを揃えることが容易でなく、不安を残したまま出発した。しかし、研修がすすむにつれ私の不安は見事に払拭された。リーダー役となって全員の意見をとりまとめてくれる学生、ムードメーカーとして盛り上げてくれる学生と、それぞれの個性にあわせた役割分担が自然とでき、すぐに17名が一つのチームとなった。

前半のタイでは、タイ人学生の温かいおもてなし精神に学生の緊張はすぐに解きほぐされ、学生交流、講義の聴講、研究室見学、キャンパスツアー、日系企業訪問、さらにはアユタヤ遺跡の見学と充実したプログラムが準備されていたことにより、積極的に英語を話してコミュニケーションをとる姿が見られた。

後半のシンガポールでは、すっかり英語を話す壁がなくなった様子で、地図を片手にバスや電車等の公共交通機関を利用して移動し、精神的にもたくましくなった。

帰国後、学生から「日本人として日本のことを深く学びます」「もっと英語を勉強します」などの感想を聞き、今回の研修が学生にとって大変良い経験になったと実感した。今後、この経験を様々な形で活かしてもらいたい。

最後に、大規模な反政府デモによる非常事態宣言が発令中のタイを訪問するにあたり、参加学生のご家族、大学関係者の皆様に多大なるご協力をいただき感謝いたします。ありがとうございました。

(藤井里香)

学生支援課という立場で日頃から今の学生を見ていて、国際的な観点から物事を考えるための基盤が十分でないと感じていた(自分もどうこう言えるレベルではないが…)。

つまり、日常の様々な出来事や事象に対して、国際的な視点に立った考察・判断を行うには、あまりにも各国の歴史、文化、政治、外交等の知識が乏しく、また、それと同じくらい日本のそれについても理解が足りていないのだ。

今回の研修に参加した学生は、海外でのコミュニケーション等を通じて、こうした課題を痛感したであろう。ただ、文字通り“身を持って”外の世界を経験したからこそ、同じ生活を過ごす中でも、研修前と比べ、そういった情報や知識等の吸収力は格段に違って来るはずだ。

今回の研修を通じて、国際的な感覚を養うことができ、また、先に述べたようかたちで、その“伸びしろ”を大きくできたことは、参加した学生にとっ

て非常に価値のあることだと思う。当然これは自分にも当てはまることであり、このような機会を与えていただいたことに対して、改めて深く感謝したい。(弘末尚史)

7. 終わりに

日本人学生による海外研修は、やはりアジアがフィールドとして最適だと考えている。アジアの中では科学技術立国として先頭を走っていたはずの日本が、いつの間にか追いつかれ、追い越されつつある存在だと実感できるからだ。

これはタイ、シンガポールだけでなく、中国、韓国、台湾、香港、インドネシア、ベトナムの各大学の勢いを見れば明らかだろう。これらの国々は、21世紀中盤に向けた確固たるビジョンを持ち、国家戦略の後押しによって留学生を増やし、人材を育成する努力を続けている。

その人材とは、グローバルリーダーとして活躍できる学生たちのことだ。グローバル化が進む世界で通用するには、共通言語である英語ができることは最低条件だが、なにより自分の専門分野をはじめ、日本の歴史や外交、文化、芸術について、幅広く語れることが必要だろう。

今回の研修を通じ、KUTの学生たちは、自分たちが「語れる」ものを持つことがいかに大切か、異文化の中で痛感したはずだ。また、歴史や文化、言語、宗教、民族のDiversity(多様性)についても考えさせられたのではないか。

韓国の大学ではすでに実施しているが、今後はKUTでも学生たち自らが企画・立案するような研修があってもいいと思っている。

KUTの国際的なレベルを高めるうえで、優秀な留学生を受け入れるのはもちろんだが、英語力を鍛え、留学やインターンシップで海外に飛び出す学生を増やすことにも主眼を置きたい。視野を広げたKUTの学生たちが、今後、どう変わっていくのか、その力量を社会にどう生かしていくのか、長期的に見守っていきたい。

The Results of the International Relations Program during the Thailand & Singapore Study Tour

Shinichiro Sakikawa*

(Received: May 7th, 2014)

International Relations Center, Kochi University of Technology
185 Tosayamadacho-Miyanokuchi, Kami, Kochi, 782-8502, JAPAN

* E-mail: sakikawa.shinichiro@kochi-tech.ac.jp

Abstract: The Thailand & Singapore study tour of KUT in the 2013 fiscal year was conducted from March 2nd to the 12th. Seventeen students, from the School of Systems Engineering, the School of Environmental Science and Engineering, and the School of Management were participated. For the purpose of learning the impact of globalization and feeling the energy of raising Asian power, Thai-Nichi Institute of Technology(TNI), Chulalongkorn University, King Mongkut's University of Technology Thombili(KMUTT), Ajinomoto factory of Thailand and Agency for Science, Technology and Research(A*STAR), and National University of Singapore(NUS) were selected as training facilities by International Relations Center of KUT. The director of International Relations Center, Professor Shinichiro Sakikawa, Professor Masahiro Ouchi, Educational Lecturer Yasuo Katayama and two members of administrative staff accompanied the students. During the study tour, KUT students interacted with foreign students and discovered the academic and research levels at TNI, Chulalongkorn, KMUTT and NUS. Thai and Japanese students spoke in English, studied different cultures, and deepened their friendships. It is believed that this was a precious opportunity for students to realize globalization. We would like to continue to strengthen the partnership with universities in Asia.